

ウェールズ語成人教育の発展

ウェールズ語成人教育の発展

松 山 明 子

はじめに

10年ごとの調査のたびに低下の一途にあったウェールズ語話者の割合は、2001年の国勢調査ではじめて上昇に転じた⁽¹⁾。1991年の調査と比較すると、話者率は18.5%から20.8%へ上昇、およそ50万人だった話者数は58万人余りに増加、という結果であった（Welsh Language Board 2003）。ウェールズ語復興の主要因としてしばしば指摘されるのは、主にウェールズ語で授業をすることでウェールズ語と英語の二言語のスキルを育成する学校の発展である。ウェールズ語保育を通じて、ウェールズ語を話さない家庭の子どもたちもこれらのウェールズ語学校の通学に備えることができる。

ウェールズ語と英語を同等に扱うよう公的団体に求める1993年の言語法や、二言語サービス提供の義務を一部の民間企業に拡大した2010年の言語法によって、二言語のスキルが求められる場はますます広がっている。ウェールズ語推進のためには、ウェールズ語話者になる機会が、幼少期や就学時期に限定されず、人生のどの時期にも開かれていることが重要であろう。その意味でも、ウェールズ語を学ぼうとする大人の学習を支援することは、二言語社会実現に不可欠な柱である。科目として学習したウェールズ語を後年再び学ぶ機会としても、大人になってからウェールズに移り住んだ人が学習を始める機会としても、大人のためのウェールズ語コースは重要な支援となる。

ウェールズ語の復興との関連では、学校におけるウェールズ語教育に注目が集まるが、本稿では、夜間講座などでウェールズ語を学ぶ大人たちのウェールズ語学習について考察することにしたい。

1. ウェールズ語成人教育の新たな流れ

Newcombe (2007) は、大人にウェールズ語を教える方法が大きな転換を迎えたのは 1960 年代であったと指摘している。それ以前、第二言語としてウェールズ語を学ぶ学習者向けには、ウェールズ語の文芸作品を教材にした授業が中心で、保守的な文章語と話しことばの違いもあって、中等教育修了資格試験などウェールズ語の試験に合格している学習者でも、ウェールズ語を話すことができない、ということもあったという。話せるようになる、ということがウェールズ語を学ぶ目的とされていなかったからである。1960 年代になって、話しことば中心のウェールズ語コースが現れたことで、その状況に変化が訪れる。

Morris (2000) はウェールズ語を話すことができることを目指すウェールズ語コースが発展した背景として、この時期に言語の存続に対する危機感が高まったことを指摘している。10 年ごとの国勢調査でウェールズ語を話すと回答した人の割合は、1951 年に 28.9%、1961 年に 26.0%、1971 年に 20.8% に、と次第に低下していた。ノーベル賞候補にもなった劇作家ソングース・ルイスが、BBC のラジオ講演で「現在の趨勢が続けば、21 世紀の始め頃にはウェールズ語は死語になっているだろう」と述べ、ウェールズ語を守るための市民運動を呼びかけたのは 1962 年であった (ルイス 1962: 172)。法廷への出頭を要請する召喚状をウェールズ語で用意するよう要求して道路に座り込んだり、郵便局に押しかけてウェールズ語サービスを求めるなどの抗議運動が盛んに行われた。また、文書のウェールズ語表記を求めて納税拒否で抗議する市民も現われた。1962 年のウェールズ語協会 (カムデイサス・アル・イアイス Cymdeithas yr Iaith) 結成以降、200 人もが抗議のための違法行為で服役したともいう (Phillips 2000)。

ちょうどこの時期に、保守的な文章語とさまざまな方言のある話しことばの中間に位置づけられるウェールズ語の標準的話しことばを定義しようとする試みが行われた。Cymraeg Byw (カムライグ・ビュー、「生きているウェールズ語」の意味) と呼ばれる標準的な話しことばの形態

は、話すことを目指す学習者になるべく混乱なく言語を導入し、いずれは教室で網羅することのできない言語の多様な姿に触れるために有効な前段階として「大人・子どものウェールズ語教育の成功に貢献した要因の1つ」となった (Davies 1988: 208)。

1970年の学習者向け案内冊子にはこのような流れの中で出版されたテキストに加え、ウェールズ語コースが開講されていた132カ所のリストがある (Welsh Joint Education Committee 1970)。このリストには、Beginners、Semi-fluent、Near-fluentの3段階の表示があり、2つ以上のレベルでクラスを設けている開講場所が50カ所ほどある。また、ウェールズ大学アバリストウィス校の調査によれば、1972-73年度には、388クラスのウェールズ語コースに計5000人以上の学習者が参加したという (Council for the Welsh Language 1976)。ナショナル・アイステズヴォッドの会場に学習者テント (パペフ・ア・ダスグウィル Pabell y Dysgwyr / The Welsh Learner's Tent) が登場するのも1970年代である。次節では、この時期のウェールズ語成人教育に起こった大きな変化を取り上げる。

2. ウルバン方式の導入

1970年代に登場したウルバンと呼ばれる集中講座は、ウェールズ語を話すことを目指す学習者の希望に応える方式として、その後のウェールズ語成人教育のあり方を大きく変えることになった。

ウルバンは、もともと1880年代にヘブライ語を話しことばとして復興した試みに基づいて開発され、1950年代イスラエルへやって来る多数の移住者にヘブライ語を教えるために使われた方式だという (Council for the Welsh Language 1976; Jones 1991; Newcombe 2007)。同時期にやって来たさまざまな言語を母語とする移住者が一緒に学ぶという必要性から、目標言語を用いながら授業を行う直接法で、移住者たちの生活上のニーズを満たせるよう速習が求められるイスラエルの状況を反映した方法であった。教育または訓練を意味する Ulpan という呼び方は、ウェールズ語ではイルパンと発音されてしまうため、Wlpan と綴られることも

ある。

ウェールズ語の教え方が変化した 1960 年代から、言語の復興を可能にする方法としてウルパンへの関心が高まり、1972 年にはイスラエルから専門家がカーディフを訪れて現地の実践について講演が行われたり、ウェールズからイスラエルへ視察が行われたという (Newcombe 2007; Baker and Jones 1998)。その翌年の 1973 年、カーディフで実験的にウルパン方式の授業が行われた。週に 5 回、ボランティアの講師たちによる授業に 11 人の学習者が参加し、10 人の学習者が 100 時間のコースを修了したという (Newcombe 2007)。この時期の平均的なウェールズ語コースが、週 1 回 2 時間ずつ休暇期間をはさんで年間平均で 56 時間の授業時間であったのと比較すると、通常 2 年かかる授業を 10 週間でこなすことになる試みであった。このように集中的に授業が行われるのがウルパン方式の大きな特長である。

ウルパン方式のコースで用いられる教え方は、オーラル・コミュニケーション重視で、特に初期は教師をまねることで語彙や文型を学ぶ部分が多い。英語が用いられるのはコースの初めだけで、ウェールズ語に触れる時間が 15 時間を超えるあたりから、ウェールズ語を使って授業を進める直接法にシフトしていく。学習者がさまざまな国から来た移住者で異なる言語を母語としていたために直接法で教える必要があったイスラエルの場合とは事情が異なるが、特に身近にウェールズ語話者のいない学習者にとっては、ウェールズ語の音に触れる時間を確保することが話すことを目的とする学習に不可欠となる。学習が進むにつれて、対話やロールプレイ、ゲーム形式の練習なども取り入れられる。ウルパン方式の学習が順調に進めば、20 週が終わるころまでには、さまざまな時制や動詞を用いて、対話・日記・身の回りで起きた出来事の説明ができるようになったという (Welsh Office 1990)。

ウルパン方式のコースの数は、1982 年には 43 にまで増加した (Newcombe 2007)。週に 3～5 回、夕方または日中に授業が行われ、授業時間の合計が 100 時間程度のものが多かった。合宿型のコースも現れ、

1980年にはウェールズ大学ランピター校で8週間に及ぶ合宿型ウルパン・コースに約40人が参加している。通常のウルパン・コースよりずっと多い400時間のコースを終えた受講者は3000～3500語を使って日常生活についての会話ができるようになったという。

学習者それぞれがウェールズ語を学ぶ動機づけはさまざまであるが、1984年の報告書には4つの理由があげられている（Welsh Office 1984）。ウェールズ語話者を配偶者に持つ学習者、子どもがウェールズ語学校に通う学習者、職場での必要性から学習する人々、住んでいるウェールズ語地域との関わりから学習する人々、の4つの場合である。これらの理由は今日の学習者たちにも当てはまるものである。Newcombe（2007）はまた、親や祖父母などの世代から自分に継承されず家族の中で失われてしまった言語を取り戻したいと希望する学習者が、ほぼどのクラスにもいる、と述べている。

ウルパン方式の登場はウェールズ語成人教育における画期的な変化ではあったが、従来の毎週型のコースが一掃されてしまったわけではない。誰もが集中的に時間を割いてウルパン方式のコースに参加することができるようではなく、ウェールズ語学習をアクセスしやすいものにするためにも、両方の形が必要であった。ウルパン方式のコースが定着したことで、これ以降のウェールズ語コースは、ウルパン方式の集中型と、毎週1回の非集中型の2つの形態が併存することになった。

3. 1980年代から1990年代

ウルパン方式の導入によってより多様な学び方が可能になり、ウェールズ語コースの数がさらに増加するにつれて、もっと多くの学習者がスムーズに学習を始めることができ、順調に継続することのできる枠組みを全体として整備することが次の課題になった。1980年から1982年にかけて行われた調査によれば、1981年秋学期と1982年春学期には168カ所で344のコースが開講され、カーディフのウェールズ大学ウェールズ語成人教育センターなどのコースも合わせると、1981年秋学期に

は4,255人、1982年春学期には2,852人、合わせて7,017人がウェールズ語コースを受講したという（Welsh Office 1984）。ウルパン・コースの履修者はそのうち702人であった。ウルパン方式のコースを提供していたのは主に大学の市民講座部門で、1981年秋学期と1982年春学期に開講された43のウルパン・コースのうち30が大学の市民講座部門が運営するものだったという。次第に、大学などの高等教育機関がウルパン・コースなどの集中型や上級のコースを、州の教育当局などその他の機関が毎週1回2-3学期間のコースを提供するという役割分担が確立していった（Welsh Office 1993）。

1980年代の状況をみると、州の教育当局の中には、ウェールズ語コース運営の担当者をおいているところもあったが、そうでない州では生涯学習などの担当者が業務の一部としてその運営を担当する形になっていた。ウェールズ語のコースが裁縫、フラワーアレンジメント、健康維持など生涯学習講座の1科目という位置づけだったからである。大学の状況をみると、ウェールズ大学のバンガー校、アバリストウィス校、スオンジー校の市民講座部門には、講師として教えた経験を持つウェールズ語教育の専門家が担当者としてコースの運営にあたる体制が整備されてきた（Welsh Office 1984）。1980-81年度以降、Welsh Office からウェールズ語コースを運営する機関に助成が行われ、1993年までに18人の講師の採用や、教材の充実、授業料の引き下げなどが可能になったという（Welsh Office 1993）。

ウェールズ全体では、ウェールズ共同教育委員会（Welsh Joint Education Committee、ウェールズ語ではキッドブウィフゴル・アディスグ・カムリ Cyd-bwyllgor Addysg Cymru、）が調整にあたり、ウェールズ語コースが開講されるところをリストアップした案内冊子やこれからウェールズ語を学ぼうとする人に必要な情報を集約した案内書『ウェールズ語学習にあたって知っておくべきこと』（“All You Need to Know about Learning Welsh”）を毎年作成するなどの宣伝活動も行われていた。その後ウェールズ共同教育委員会にはウェールズ語成人教育のための部

会が設けられ、中長期的な戦略がここで検討されることになる。1983-84 年度からはウェールズ語成人教育の担当官がこの部会で合意に達した短期・長期目標を実行する職務にあたり、ウェールズ語コースや学習機会の情報を提供するサービス、ウェールズ語学習の宣伝や関連イベント、学習者向けのメディア番組制作の促進、評価や試験の提供などに関わるようになった (Welsh Office 1993)。

ウェールズ語成人教育のための部会が 1988 年からの 4 年間の成果を評価した報告書には、ウェールズ語コースの開講形態が、毎週 1 回のコース、ウルパン方式のコース、300 時間以上のウルパン方式のコースの 3 つに整理されている (Welsh Joint Education Committee 1992)。その上で、どの州でもこの 3 種類のコースが受講可能な環境を作らなければならない、という指針が示され、この目標が比較的達成されている例として、南東部のミッド・グラモーガン州 (Mid Glamorgan、ウェールズ語ではモルガヌグ・ガノル Morgannwg Ganol) があげられている。ミッド・グラモーガン州では、グラモーガン大学が 300 時間以上のウルパン方式のコースを、カーディフのウェールズ大学ウェールズ語成人教育センターが州内の複数個所でウルパン方式のコースを、そして州の教育当局が毎週 1 回のコースを開講している、という状況であった。

どの地域に住んでいる人もウェールズ語のコースを受講できるようにすることと並んで重要なことは、学習の継続である。1990 年の北部の状況を分析した報告書は、コース途中でのドロップアウトの問題に触れ、ウェールズ北西部のリル (Rhyl、ウェールズ語ではア・リル Y Rhyl) で同時期に開講された 2 つのクラスの対照的な結果を紹介している (Welsh Office 1990)。秋学期と春学期の 2 学期にわたるコースで、火曜夜開講の登録者 15 人未満だったクラスは 2 学期の終わりになっても出席状況が良いのに対し、水曜夜開講の登録者 37 人のクラスはクリスマス前には出席者が半減し、春学期半ばになっても継続しているのは 5 人未満だったという。同報告書では、登録者が 10 人未満のクラスでは登録者の 80% が 2 学期の終わりまで出席し続けた一方で、履修人数が

多い例として 30-60 人規模のクラスもあったとして、特に初級者向けのクラス数を増やす必要があること、また、クラスを増やすのが困難だった要因として講師が確保できなかったことをあげ、講師の養成が必要であるとも指摘している (Welsh Office 1990)。また、学習者が各自の習熟度に合ったクラスで学習を継続できるようなコースの開設も必要になる。1990 年の同報告書は、ある上級クラスで、学習 2 年目の学習者と中等教育修了資格試験に相当する試験の受験準備をする学習者、まもなく講師になるためのコースを取ろうとする人など、習熟度に大きな差のある学習者が同じクラスで学習していた極端な例にも触れている (Welsh Office 1990)。習熟度による十分なレベル分けは、それぞれの開講場所で一定数以上のクラスを提供できるようになって初めて可能になることであるが、次節では、学習者が学習を継続していく過程で重要な習熟度の段階設定について論じたい。

4. 学習者の習熟度

習熟度の段階設定について振り返ってみると、前述の 1970 年の案内冊子に Beginners, Semi-fluent, Near-fluent とあるように、当初、ウェールズ共同教育委員会は、3 段階を考えていた。レベルの名称は、1984 年の報告書で Introductory, Further, Bridging となったり、1992 年の報告書で Foundation, Continuation, Advanced となっていたりはするが、1990 年代半ばまでは基本的には 3 段階の設定であった (Welsh Office 1984; Welsh Joint Education Committee 1992)。週 1 回のコースで学習する場合、平均な授業時間は、1 回 2 時間、秋学期と春学期の 2 学期制で、年間でおおよそ 56 時間という限られた時間であり、初級クラスで 1 年学習した学習者が次の年度に中級クラスへ、3 年目には上級クラスへ進み、週 1 回の授業に 3 年間参加したことで流暢な話者になると想定するのは楽観的すぎる。すでに 2 年間ウェールズ語のコースを受講した 3 年目の学習者であっても週 1 回の授業以外に十分な練習ができていなかった場合、上級クラスに入っても、Near-fluent (ほぼ流暢に話せる) という名称に

見合うだけのスキルを身につけるのは容易ではない。

1984年の報告書には上記にあげた Introductory, Further, Bridging の3つに加え、Mixed（混合）という分類があり、複数のコースを設けるだけの十分な数の受講者がいない開講場所では、学習者の習熟度が混在するクラスを設けざるをえない状況にあったことが推測できる（Welsh Office 1984）。このような状況では段階の設定だけ細分化しても、それぞれの開講場所で全段階のクラスを開講することは難しく、学習者の習熟度をより適切に反映できるクラスを実現するには、受講者数の伸びを待たねばならなかった。1972-73年度におよそ5,000人、1981-82年度におよそ7,000人だった学習者数は、ウェールズ共同教育委員会が1991年に行った調査で11,000人程度まで増加した（Council for the Welsh Language 1976; Welsh Office 1984; Welsh Office 1993）。その数は、ウェールズ語委員会設立後には、1993-94年度の13,330人から、1996-97年度には19,320人、1997-98年度には21,029人と増加し続けた（Welsh Language Board 1999）。1980年代から1990年代にかけて、学習者数がおよそ3倍になったことで、習熟度の段階設定を充実させることが現実的に可能になっていく。

1990年代に学習者向けに作られた案内冊子の記述を見てみよう。1994-95年度にミッド・グラモーガン州内の開講コースを紹介した冊子には、レベル1からレベル4まで4つの段階がある（Mid Glamorgan Education Department 1994）。会話でのコミュニケーションスキルに重点をおく初級者向けのレベル1のコースを受講することで、挨拶する、お互いのことについて質問したり答えたりする、過去に起こった簡単な出来事を描写する、などのことができるようになる。週1回のコースで1年間の学習を終えている人向けのレベル2は、話すことに自信をつけ、読み書きやリスニングの力を伸ばしながら既習事項を確認するコースである。レベル2のコースを受講することで、時刻について話す、何かをするように頼む、許可を求めたり許可を与えたりする、健康状態について話す、などのことができるようになる。レベル3は、自信を持って日

常的な会話ができるようになることに加え、ウェールズ語ラジオ局ラディオ・カムリ（Radio Cymru）やウェールズ語放送局エス・ベドワル・エック（S4C）の番組、地元新聞のウェールズ語記事の内容が大まかに把握できるようになる、ことを目指す。その上のレベル4を履修することで中等教育修了資格試験に相当する試験を受験できる、とされている。

このように段階設定としては3つから4つに拡充されてはきたが、開講されているコースのリストをみると、大多数が1/2や2/3というレベル表記で、段階を4つに増やしても、実際にそれぞれの開講場所で4段階のコースを開くまでに至っていなかった状況がうかがえる。ごく少数だが1/2/3/4と表示されているコースもあり、一部の開講場所では、1980年代にあったMixed（混合）のクラスしか開講できない、という状況も続いていたようである。また、中等教育修了資格試験に相当する試験を目指すレベル4の説明として、「受講者のなかには大学入学資格試験（Aレベル）に相当する試験を目指す人もいる」という記述もあり、中・上級レベルのレベル分けがまだ十分ではなかったようである。

その4年後、1998-99年度のグラモーガン地域の案内冊子には、週1回1年で54時間の授業を受けることで、Stage 1からStage 6の6段階を毎年1つずつ進んでいく、という説明がある（Glamorgan Welsh for Adults Consortium 1998）。レベルの名称としてウェールズ語のSafon 1（サヴォン 1）からSafon 6（サヴォン 6）と併記されているこの6つの段階を、1994-95年度の4段階のものと比べてみると、合計216時間の授業を受けることになる4年目のSafon 4 / Stage 4に「中等教育修了資格試験の受験ができる」という説明があることから、これが1994-95年度のレベル4に相当する段階であることがわかる。身の回りの話題について会話ができることを目指すこのSafon 4 / Stage 4の次は、一般的な話題で会話ができること、ウェールズ語話者向けに書かれた文章を読むことができることに加え、ウェールズ語放送の視聴や書くスキルを伸ばすことを想定したSafon 5 / Stage 5があり、Safon 6 / Stage 6を大学入学資格試験（Aレベル）に相当する試験を目指すレベルとしている。コースの

一覧には、一部に 5/6, 4/5 など複数の段階にまたがるレベルの記述も見られるが、1994-95 年度に比べて、段階設定の枠組みを反映してコースが開講されている様子がうかがえる。

1999-2000 年度カーディフのウェールズ語教育センターの開講コースを紹介した冊子にも、6 段階のなかの Stage 4 を終わると中等教育修了資格試験の受験が、Stage 6 を終わると大学入学資格試験の受験ができるというほぼ同一の段階設定が見られる (Welsh Language Teaching Centre 1999)。Stage 1-6 に加えて、1 回 1.5 時間、週 4 回 2 週間または 1 回 3 時間週 4 回の合計 12 時間ウェールズ語の学習を体験することのできる初級者向けのお試しコースと、ウェールズ語やウェールズについてさらに深く学ぶことができる Stage 7 がある。ウェールズ語教育センターはウルパン方式の集中講座を提供してきたウェールズ大学の施設で、Stage 1-3 は週 1 回のコースではなく、ウルパン方式のコースが中心になっている。ウルパン・コースを修了することで Stage 1-3 をカバーしたことになり、集中型で学習をスタートして非集中型で学習を続けることができる。ウルパン・コースに続く段階には、Stage 4 が Estyn (エスティン、「拡大する」の意味)、Stage 5 が Meistroli (メイストロリ、「習得する」の意味)、Stage 6 が Cadarnhau (カダルンハイ、「強化する」の意味)、というウェールズ語の名称もある。次節では、学習者向けの試験制度に触れるとともに、コースを運営する機関によってばらつきがあったレベルの設定が現在どのように統一されているか述べたい。

5. 学習者のための資格試験と習熟度レベルの統一

語学の学習者の多くが試験を利用する。ウェールズ語を話すことができるようになることを目指して学習する多くの学習者にとって、資格試験に合格することは主要目的ではないが、試験を受けることが学習の過程における目標になったり、学習の成果を認識する機会ともなる。就職の機会を広げたいといった動機づけで学習する人にとっては、スキルを客観的に示すことは重要である。また、試験に合格していることで、学

習者の習熟度が把握しやすくなり、学習者をどのレベルのクラスに入れるかを定める目安になる場合もある。

1960年代から70年代にかけて、ウェールズ語成人教育のあり方に大きな転換はあったが、大人の学習者が利用できる資格試験は、16歳のときにさまざまな教科・科目について実施される中等教育修了資格試験のOレベルの受験などに、限られたままであった。GCSEのOレベルは、16歳で義務教育を修了する生徒のためのもので、内容的にも、書きことば中心の試験であったため、話すことができるようになることを目指す大人の学習者にはそれほど魅力的な試験とは言えなかった(Welsh Office 1984)。

1991年、ウェールズ共同教育委員会は大人の学習者向けに、話しことばのコミュニケーションに重点をおく試験を始めた。中等教育修了資格試験のOレベルに相当する Defnyddio'r Gymraeg (デヴニジオール・ガムライグ、「ウェールズ語を使う」の意味)、と大学入学資格試験のAレベルに相当する Defnyddio'r Gymraeg Uwch (デヴニジオール・ガムライグ・ユーフ、ユーフは「上級の」の意味)の2つの試験である。1991年6月には250人、1991年12月には32人、1992年6月には332人が Defnyddio'r Gymraeg 試験を、1991年と1992年で合わせて50人が Defnyddio'r Gymraeg Uwch 試験を受験した(Welsh Joint Education Committee 1992)。Defnyddio'r Gymraeg (デヴニジオール・ガムライグ)試験は、現在、Mynediad (マネディアド、「入門」の意味)、Sylfaen (サルヴァエン、「基礎」の意味)、Canolradd (カノラズ、「中級」の意味)の3つになっているが、これは、習熟度の段階設定に沿って細分化されたものである。

現在、習熟度の段階とその名称は次の5つに統一されている。Mynediad (マネディアド、英語の名称はEntry)、Sylfaen (サルヴァエン、英語の名称はFoundation)、Canolradd (カノラズ、英語の名称はIntermediate)、Uwch (ユーフ、英語の名称はHigher)、Hyfedredd (ハヴドレズ、「熟達」の意味、英語の名称はProficiency)の5つである。

コース提供者によって少し違うが、週1回の授業の場合、Mynediad、Sylfaen、Canolraddの3つの段階にそれぞれ2年ずつ、Uwchに3年かけてHyfedreddに到達するのを目安にしているところが多い。Mynediad 1、Mynediad 2、Sylfaen 1、Sylfaen 2、Canolradd 1、Canolradd 2、Uwch 1、Uwch 2、Uwch 3の9つのレベルで開講されるコースを経て、Hyfedreddに到達することになる。Hyfedreddのレベルで開講されるコースも一部あるが、そこに到達することが学習を進めていく目標、というわけである。公的団体がウェールズ語と英語の二言語を同等に扱うよう求める1993年の言語法の影響からか、上級者や話者向けに職場でウェールズ語を用いることに特化したコースも増加している。

すべての開講場所で全ての段階・種類のコースが開講されるわけではないが、合わせて10に及ぶレベルから各自の習熟度に応じてコースを選ぶことのできる今日の環境は、Beginners、Semi-fluent、Near-fluentの3つのレベルしか用意されていなかった70年代の状況から大きく進歩したと言えるだろう。

6. 1990年代から2000年代

ウェールズ語が英語と同等の地位を持つ言語であるとした1993年の言語法や、言語法の規定によってウェールズ語の使用を促進するための方策を実施する機関として設置されたウェールズ語委員会、1999年に発足し、ウェールズ語と英語の二言語で運営されるウェールズ議会、2010年言語法によるウェールズ語コミッショナーなど、1990年代以降ウェールズ語を取り巻く環境は大きく変化している。

1970年代から1980年代にかけて、大学などの高等教育機関が集中型のコースを、州の教育当局などが毎週1回のコースを提供するという役割分担が定着していたが、90年代に入り、週1回非集中型のコースは継続教育カレッジを中心に提供されるようになった。1994年には、各機関で個別に提供されるウェールズ語コースの連携を図るため、ウェールズ語コースを開講している大学、カレッジ、自治体などで構成される

コンソーシアムが設立された (Welsh Language Board 1999)。地域ごとの 8 つのコンソーシアムを通じて、どのようなコースをいつどこで開講するか調整や、開講されるコースをリストアップした案内冊子の作製・配布など地域内で統一的な宣伝活動を行う体制が強化された。前述のグラモーガン地域の 1998-89 年度版案内冊子はこのコンソーシアムによるものである (Glamorgan Welsh for Adults Consortium 1998)。さらに、2005 年 3 月、北部、中部、南西部、グラモーガン、カーディフとグラモーガン溪谷、グウェントの 6 つの場所にウェールズ語学習センターが設立された。生涯学習科目の一環としてではなく、ウェールズ語コースの提供のためだけに特化した拠点と、ウェールズ語成人教育に関わることが一本化して行われる体制ができたのである。

おわりに

1990 年代末に 20,000 人を超えたウェールズ語コース受講者は、2008-09 年度には 27,375 人まで増加した (Welsh Assembly Government 2010)。学習者の中には同一年度内に複数のコースを受講する人もいる。ウェールズ議会政府の 2009-10 年度報告書はこのことを区別し、もっとも新しいデータとして、のべ受講者数 27,375 人、学習者数 18,220 人、という数をあげている。1970 年には Beginners、Semi-fluent、Near-fluent という 3 段階でしか考えられていなかった学習のプロセスは、Mynediad 1、Mynediad 2、Sylfaen 1、Sylfaen 2、Canolradd 1、Canolradd 2、Uwch 1、Uwch 2、Uwch 3 の 9 つのレベルをを経て Hyfiedredd に到達すると想定されている。もちろんウルパン方式のコースを経ることでこのプロセスはスピードアップされるわけだが、このような変化は、実際にウェールズ語を使いこなすことができるようになるまでの道のりをより現実的にとらえた結果でもある。

最後に、話者になることを目指しながらその途上にある学習者たちが、どのように言語の復興に貢献しうるのかその意義を考えてみたい。約 2 万人という受講者の数は、58 万人という話者の全体数からみると、そ

れほど大きな数ではないように思えるかもしれないが、ウェールズ語学校の児童数と比較してみよう。2011年の統計によれば、小学生のほぼ20%にあたる51,244人がウェールズ語学校に通っているという（Welsh Assembly Government 2011）。ウェールズ語の学習者は、コース受講者だけではない。コース受講後に自分で学習を継続している人、ラジオやテレビの学習者向け番組で学んでいる人、オープン・ユニバーシティやグラモーガン大学などの通信教育で学んでいる人、身近にいるウェールズ語話者から実践的に学んでいる人など、さまざまな学習者がいる。例えば、BBC ウェールズで放送されていた学習者向けラジオ番組『キャッチフレーズ（Catchphrase）』は、毎月の「学習者ノート」を購読していた人だけでも1,000人以上いたという（Welsh Joint Education Committee 1992）。近年では、ウェブサイトの学習者向けページなどを利用することも可能である。このようにウェールズ語コース以外の手段で学ぶ、人数の把握が困難な学習者も含めれば、学習者の総数は数万人に及ぶと考えられ、言語復興の原動力とも言われるウェールズ語学校で学ぶ小学生の数に匹敵する規模になるだろう。

2001年の国勢調査でウェールズ語を話すことができると回答した人は20.8%であったが、「ウェールズ語を理解する、話す、読む、または書くことができますか」という質問に対して、23.6%が話しことばのウェールズ語を理解できると回答している（Welsh Language Board 2003）。ウェールズ語で一通りのスキルを持ち、「話す」「書く」「読む」の3つとも「できる」と回答した人が16.3%だったのに対し、「理解する」「話す」「書く」「読む」のうちどれか1つでも「できる」と答えた人は28.4%であった。回答者数では、「話す」「書く」「読む」の3つに該当する人が457,946人にだったのに対し、どれか1つでも「できる」と答えた人は797,717人で、約34万人の差がある。このように4つの言語技能から見ただけでもウェールズ語のスキルはさまざまで、また、一口に「話すことができる」と言ってもその程度にも差があるので、ウェールズ語話者とそうでない人々は単純に二分されるわけではない。ウェー

ルズ語で十分に機能できる話者と全くウェールズ語と接点がない人の中には、さまざまな形でウェールズ語と関わる人がある。ウェールズ語と英語の二言語社会の実現は、ウェールズ語話者だけでなくウェールズの人々皆に関わる課題であり、学習を通じてウェールズ語と関わりを持つ人々の層が拡大していくこともまた、二言語社会への一歩である。学習の結果「話者」のレベルまでたどり着くことだけが言語の復興に貢献するわけではない。

ウェールズ語学校が話者の再生産において大きな役割を果たしていることは間違いないが、子ども時代が唯一バイリンガル話者になることのできる機会、ということであってはならない。大人がウェールズ語を学習することのできる環境を整備し、成人学習者を支援することは二言語社会へ向けての重要な取り組みなのである。

注

- (1) 日本語文献の中には、言語本来の呼び方を尊重し、「カムリー (Cymru)」という国名から「カムリー語」という表現をとっているものや、「カムライグ (Cymraeg)」という言語名から「カムライグ語」という呼び方を合わせて紹介するものもあるが、本稿では、国名を「ウェールズ」、言語を「ウェールズ語」とする。

参考文献

- ルイス, ソンダース (1962) 松本達郎訳 (1988) 「ウェールズ語の未来」『獨協大学英語研究』31号 pp.171-195.
- Baker, C. and Jones, S. P. (1998) *Encyclopedia of Bilingualism and Bilingual Education*. Multilingual Matters.
- Council for the Welsh Language (1976) *Welsh for Adults: a Report to John Morris, Secretary of State for Wales by Council for the Welsh Language*. Cardiff: HMSO.
- Davies, C. (1988) 'Cymraeg Byw.' M. Ball (ed.) *The Use of Welsh*. Clevedon: Multilingual Matters. pp.200-210.
- Glamorgan Welsh for Adults Consortium (1998) *Opportunities for Welsh 1998/99*. Pontypridd: Glamorgan Welsh for Adults Consortium.
- Jones, C. M. (1991) 'The Ulpan in Wales: a study in motivation.' *Journal of Multilingual and Multicultural Development*. Vol.12, No.3, pp.183-193.
- Mid Glamorgan Education Department (1994) *Opportunities for Welsh: Morgannwg*

- Ganol 94/95*. Pontypridd: Mid Glamorgan Education Department.
- Morris, S. (2000) 'Adult education, language, revival and language planning.' C. H. Williams (ed.) *Language Revitalization*. Cardiff: University of Wales Press. pp.208-220.
- Newcombe, L. P. (2007) *Social Context and Fluency in L2 Learners: the Case of Wales*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Phillips, D. (2000) 'The History of the Welsh Language Society 1962-1998.' G. H. Jenkins and M. A. Williams (eds.) 'Let's Do Our Best for the Ancient Tongue': *The Welsh in the Twentieth Century*. Cardiff: University of Wales Press. pp.463-490.
- Welsh Assembly Government (2010) *Iaith Pawb and Welsh Language Scheme Annual Report 2009-10*. <http://wales.gov.uk/topics/welshlanguage/publications/iaith/?lang=en> (2010 年 7 月 13 日)
- Welsh Assembly Government (2011) *Schools' Census 2011: Final Results*. <http://wales.gov.uk/topics/statistics/headlines/schools2011/110906/?lang=en> (2011 年 9 月 6 日)
- Welsh Joint Education Committee (1970) *Directory: Teaching Welsh as a Second Language to Adults*. Welsh Joint Education Committee.
- Welsh Joint Education Committee (1992) *Welsh for Adults: the Way Forward*. Cardiff: Welsh Joint Education Committee.
- Welsh Language Board (1999) *Welsh for Adults Strategy*. <http://www.byig-wlb.org.uk/English/publications/Publications/228.pdf> (1999 年 8 月 3 日)
- Welsh Language Board (2003) *Census 2001: Main Statistics about Welsh*. <http://www.bwrdd-yr-iaith.org.uk> (2003 年 9 月 23 日)
- Welsh Language Teaching Centre (1999) *Welsh Language Courses for Adults in Cardiff and the Vale 1999-2000*. Cardiff: Welsh Language Teaching Centre.
- Welsh Office (1984) *The Teaching of Welsh as a Second Language to Adults*. Cardiff: H.M.S.O.
- Welsh Office (1990) *Report by H.M. Inspectors on a Survey of Welsh Classes for Adults on the North Wales Coast Inspected during Spring Term 1989*. Cardiff: Welsh Office.
- Welsh Office (1993) *Report by H.M. Inspectors on a Review of Teaching Welsh for Adults during the Period 1987-1992*. Cardiff: Welsh Office.

